

令和 2 年 7 月 5 日現在

機関番号：34416

研究種目：挑戦的研究(萌芽)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K18496

研究課題名(和文)中国口語語彙の音的分類方法確立のための予備的研究

研究課題名(英文)A preliminary study for establishing a new method of phonetic classification in Chinese colloquial vocabularies.

研究代表者

玄 幸子(GEN, Yukiko)

関西大学・外国語学部・教授

研究者番号：00282963

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,800,000円

研究成果の概要(和文)：中国語口語音を歴史的な観点から再構し、その体系を捉えなおすことを目的として進めた結果、口語資料に見える漢字を表音手段としてのみ使用する語彙の扱いについて一定の処理方法を見出した。例えば、「填償」を「田常」と書写するのは漢字字義を全く無視した音表記として漢字を使用しているが、誤写として消し去るのではなく、相互に紐づけることで使用当時の口語の音韻体系を明らかにし得る貴重な言語音資料であることを示し、中国近代口語語彙総合索引web公開に向けての方法を確立した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

従来の中国語音韻論は、韻書(漢字音を示す辞書)を研究対象の中心に置き、上古・中古・近世・現代というように各時代の漢字音体系を考察し、その上に音韻の変遷を歴史的に考察するという手法をとるが、本研究の口語資料における別字・異文を集約し漢字音ではなく口語語彙の語音を再構しようとする試みは、これまで個別的成果としてごく一部に確認できるだけである。中国近代口語語彙の語音を体系的にとらえようとする点において、初めての試みであり学術的に大きな意義を持つ。

研究成果の概要(英文)：In order to reconstructing Chinese colloquial sounds from a historical perspective and reassessing the system, we found a certain processing method for handling of vocabulary that uses kanji (Chinese characters) only as a phonetic means in colloquial materials. For example, "田常" this word was used only as a phonetic transcription that means "填償 (compensation)", but it should not be erased as a misprint, must be linked to each other. We have shown that this is a valuable phonetic material that can clarify the phonological system of colloquial language. In this way, the method for the public release of "the index of Chinese modern and colloquial vocabulary" on web was established.

研究分野：中国語歴史研究

キーワード：近代漢語 中国語口語 語音 敦煌文献

1. 研究開始当初の背景

中国語は表記文字として漢字のみを認めてきたが、その漢字は表語文字という特異性によって言語音を写すことは最も苦手とするところである。漢字の3要素「形」「音」「義」の中で「音」を扱う韻書がかなり遅れて著されたことが、何よりもその特質をよく物語っている。よって中国語音韻研究は『詩経』などの押韻資料や、各時代を代表する『広韻』などの韻書の音系を分析整理し、それらを対照比較することで通時的な研究を可能にするというのが伝統的な方法であった。ところが、敦煌文献の発見により大量に出現した口語資料を目の当たりにして口語研究が急速に進む中で、語彙語法の研究と共に音韻研究にも新たな視点が生まれた。

羅常培の『唐五代西北方音』は敦煌出土の漢藏対音千字文や注音開蒙要訓などを分析することで唐五代の西北地域の方言音を分析記述したのであり、漢字とは異なる表音文字で表された資料との対比により実際の音価を考察した好著である。しかしながら、その後語彙語法研究が深化していき一方、音韻研究においてはこれを超えるような成果がほとんど見られない。

とりわけ字音ではなく語音に対する研究は、ごく特異な語彙などを除くと、中国音韻史研究ではほとんど見られない。その発想すらないと言っても過言ではない状況であった。

2. 研究の目的

漢字音ではなく言語音に対する研究法を中国音韻史研究に確立すること、それを通じて中国口語音を再構することが最終目的である。中国語においては言語音、とりわけ口語音を表記することが非常に困難であるという根本的問題を有する。この問題を解決し、口語を言語音でとらえなおすことを可視的に実現するのが、本研究の目的である。つまり、歴史的に中国語口語音の体系を再構し現代中国語辞典のようにアルファベット表記で表示、その言語音を写すのにどの漢字表記が使用されたかを一目瞭然に示す、という従来とは逆の発想で中国口語を再整理しなおすことを目指す。

「音で引く歴史口語辞典」、つまり倉石版「現代中国語辞典」の「歴史口語辞典」版を編纂することを最終目標とするが、本研究ではそのための基本的枠組みを打ちたてることを目的とする。

3. 研究の方法

中国語口語を含む漢語資料を中心に口語成分を抽出し言語音ごとの分類を試みる。そのために敦煌文献のなかでも口語性の強い変文資料の中から別字をすべて抜き出しデータを作成する。可能であれば、胡語史料中に見える従来の音韻学の理論では説明不可の部分についてもデータを収集し、両者を対照することにより、共通性、規則性が確認できるかを検証する。次の段階として、検証済みの共通性・規則性を整理し、口語音の再構が可能かどうかを実証検証する。

具体的な流れとしては、対象資料の選定を行い、基礎データベース構築のため、選定した資料からデータをとる。次にデータの整理を行い、データ収集分析整理の過程で生じた問題について検討をする。以上の手順を繰り返すことで、上記の基礎的枠組みを構築する。

4. 研究成果

論文「『廬山遠公話』校訂上の諸問題」(関西大学東西学術研究所紀要 50, 2017.4)は、初期のころの変文資料校訂について、語音を含む諸問題に起因する誤読を取り上げ、最新の研究成果をもって検討し修正を試みたものである。『廬山遠公話』を始め『舜子変』『韓擒虎話本』『燕子賦』などの口語性の高い資料を選出し、口語を抜き出し、別字表記の状況について調査を進めたが、この作業は資料積読の基礎の上にはじめて可能となる。その意味で、まずは積読の方法を提示する必要があった。

抽出作業と並行して、字音ではなく言語音を対象とする研究方法自体が中国語史の上では、従来にない新たな試みであるため、アメリカの漢学者による ABC dictionary 編纂の手法を参考にすべくミーティングを行った。ABC dictionary 主編纂者である Victor H Mair 教授をはじめ、敦煌学の権威である張涌泉浙江大学教授と高田時雄京都大学名誉教授(復旦大学特聘教授)に海外協力研究者として参加していただき、異なる視点からのアドバイスを受けたが、全メンバーから共通して『辞通』など中国の小学(伝統的語学)においても参照すべきものがあるとの指摘を受け、対象資料の幅を広げるように軌道修正を行った。

その成果は論文「中国語音別配列歴史口語辞典編纂の構想」(関西大学外国語学部紀要 20, 2019.3)にまとめて公表した。「おや字」配列の編纂方式が口語辞典において有効でないことを検証し、併せて口語の語音を表記するために書写された別字を誤写として訂正することの弊害を実証した。そのうえで『辞通』の編纂方式が語音別配列歴史口語辞典編纂の基本的方針を立てるのにどのように資するのかをみたところ、語音から意味を引くことを重視する点は、従来の辞

書にない創見であると認められた。ただ、その方法が伝統的四声の分類によっており、直接本研究課題に応用することはできないことも確認できた。そこで結論として音引き歴史口語辞典編纂の構想として具体例を提示した。次のとおりである。

biluo 【bīluó / biluó / bìluó】逼邏 辟邏 餽饌
(動詞)手配する

(参考)

逼	彼側切/入職幫
辟	必益切/入昔幫
餽	卑吉切/入質幫
邏	郎佐切/去箇來
饌	魯何切/平歌來

(考察) 現代音で第1音節の声調が第1声と第4声の差はあるものの声母は同類、第2音節は同音であるため声調を付さない見出しを立てることで、比較的処理のしやすい項目である。参考として中古音の分類を示したが、声調に関しては中古入声は現代音で各声調に分散されるため、第1声と第4声に分散しているのは説明がつく。第1音節の韻部がt入声とk入声で異なっている点に異同がみられるが、入声が緩くなった時点でほぼ同音と認識されたはずであり、この3種の漢字表記は同音語彙を写し取ったと考えて良からう。

ただしこの方法は、語彙出現の史料の成書時期を考察することを基本としなくては意味がなく、厳密に評価するならば、あくまでも大枠を提示したに過ぎない。参考に挙げた音韻資料は中古音の情報を提示したのみであり、本来ならば各時代各地域の語音を考察すべきである。

また、実際に辞書を引く場合には、表記されている漢字を探すほかないので、現代音・部首・総画数・四角號碼によらざるを得ない。以上、まだまだ解決すべき問題を多々残しつつ、一旦辞書項目の枠組みを示すことができた。

さらに「敦煌変文資料から見る口語音研究 「或」と「忽」を例として」と題して中国近世語大会で研究発表をし、変文資料の基礎方音の特徴を総合的に捉えなおすことをテーマとして、3種のテキスト：A、《敦煌變文校注》(黄征, 張涌泉校注北京: 中華書局, 1997.5); B、《敦煌變文選注》(増訂本)上, 下(項楚: 中華書局, 2006.4); C、《敦煌小説合集》(竇懷水 張涌泉 匯輯校注: 浙江文艺出版社, 2010.2)から別字を抽出したデータを処理する過程で、校録者の方針が異なる「韓擒虎話本」(S.2144R)の「或遇」を取り上げ論じ羅常培《唐五代西北方音》(歴史語言研究所単刊甲種之十二 1933) 邵榮芬<敦煌俗文學中的別字異文和唐五代西北方音>(《中國語文》1963.3)などの音韻研究上に確認されていない「德」韻と「没」韻の合流を確認している。

上記の経過報告を、3年を通じて折々に発信した。2018年は「中國文獻デジタル化の展望」(http://www.kansai-u.ac.jp/Tozaiken/lecture/asset/regular_meeting/ract190226.pdf)というテーマのもと国際シンポジウムを開催し、中國國家圖書館古籍館敦煌文獻組組長である劉波氏を招聘し「敦煌西域文獻的數字化與網絡共享 以國際敦煌項目(IDP)為中心」の演題で講演をしていただき、併せて「音引き歴史口語辭典編纂の意義と試み」という研究発表を行い、今後の取り組みを公表し識者の意見を仰いだ。また、最終年度には、当初の予定通り、海外研究協力者を招聘し国際ワーキンググループ『敦煌文献の諸相』を開催し広く研究活動結果を公開した。ペンシルバニア大学(米)Victor H Mair(梅維恒)教授の“Research methods and priorities for Middle Vernacular Sinitic (MVS)”、浙江大学(中国)張涌泉教授の<敦煌殘卷綴合—拼接撕裂的絲路文明>と題する講演に続き、玄が「敦煌文献に現れる口語語彙語音別整理の方法について」と題して発表し、研究協力者の復旦大学(中国)特聘教授である高田時雄京都大学名誉教授には「表音文字は中國語口語スタイルにどの程度影響を及ぼすか?」という研究発表で最後をまとめていただいた。

当初の予定では唇音系の語彙について上記の方法で辞書を作成する予定であったが、まずは、関連の辞書を一括検索でき、音通関係などを示す方がweb辞書としては有効に使用できると軌道修正をし、「中国近世語語彙関連辞書の総合検索」頁をweb上で立ち上げることにした。

取り上げた工具書は現在のところ『敦煌變文字義通釈』『敦煌文献語言詞典』『唐五代語言詞典』『詩詞曲語辭滙釋』『詩詞曲語辭例釋』『唐宋筆記語辭滙釋』の6種に『近代漢語詞典』および『近代漢語大詞典』の同項目の頁数を提示している。現在登録形式のミスマッチにより再登録の必要が出てきたため公開に至っていないが、準備が整い次第順次公開していく予定である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 玄幸子	4. 巻 21
2. 論文標題 日本對俗字的接受與應用 以年齡代稱與賀壽爲例	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 関西大学外国語学部紀要	6. 最初と最後の頁 55-60
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 玄幸子	4. 巻 20号
2. 論文標題 中国語音別配列歴史口語辞典編纂の構想	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 関西大学外国語学部紀要	6. 最初と最後の頁 85-94
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 玄幸子	4. 巻 第三十九號
2. 論文標題 ベルリン国立図書館所蔵トルファン文書Ch1421(T T2068)に関連して	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 関西大学 中國文學會紀要	6. 最初と最後の頁 1-20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 玄幸子	4. 巻 第三号
2. 論文標題 内藤湖南の大英博物館所蔵敦煌文献（佛典・佛經）調査について	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本古写経研究所研究紀要	6. 最初と最後の頁 27-42
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 玄幸子	4. 巻 No.
2. 論文標題 米澤善本『困學紀聞』寫本について	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 中國典籍日本古寫本の研究 Newsletter	6. 最初と最後の頁 15-18
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 玄幸子	4. 巻 第十八輯
2. 論文標題 關於《往五天竺國傳》裏面出現的語言特徵	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 漢語史學報	6. 最初と最後の頁 118-131
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 玄幸子	4. 巻 50
2. 論文標題 『廬山遠公話』校訂上の諸問題	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 関西大学東西学術研究所紀要	6. 最初と最後の頁 19-33
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計13件 (うち招待講演 3件 / うち国際学会 12件)

1. 発表者名 玄幸子
2. 発表標題 敦煌文献に現れる口語語彙語音別整理の方法について
3. 学会等名 国際ワークショップ 『敦煌文献の諸相』 (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Vivtor H Mair
2. 発表標題 Research methods and priorities for Middle Vernacular Sinitic (MVS)
3. 学会等名 国際ワークショップ『敦煌文献の諸相』（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 張涌泉
2. 発表標題 敦煌殘卷綴合- 併接撕裂的絲路文明
3. 学会等名 国際ワークショップ『敦煌文献の諸相』（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 高田時雄
2. 発表標題 表音文字は中國語口語スタイルにどの程度影響を及ぼすか？
3. 学会等名 国際ワークショップ『敦煌文献の諸相』（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 玄幸子
2. 発表標題 敦煌変文資料から見る口語音研究 「或」と「忽」を例として
3. 学会等名 中国近世語学会大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 玄幸子
2. 発表標題 阿難乞乳故事傳播的研究 以吐魯番文書與敦煌壁畫為例
3. 学会等名 第三屆東亞文與文學中的佛教世界國際學術會議（國際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 玄幸子
2. 発表標題 内藤湖南との交流に見る石瀆純太郎
3. 学会等名 東西學術研究と文化交渉 石瀆純太郎没後50年記念國際シンポジウム（國際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 玄幸子
2. 発表標題 俗文学資料及び經部資料の接合に関する研究狀況報告 その(1)
3. 学会等名 探検隊科研總括國際シンポジウム（國際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 玄幸子
2. 発表標題 日本對俗體字的接受與應用 以年齡代稱與算賀為例
3. 学会等名 21世紀漢字漢語漢文化國際學術研討會（國際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 玄幸子
2. 発表標題 音引き歴時口語辞典編集の意義と試み
3. 学会等名 「中國文獻デジタル化の展望」東西學術研究所國際シンポジウム Ku-0rcas共催 (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 劉波
2. 発表標題 敦煌西域文獻的數字化與網絡共享 以國際敦煌項目 (IDP) 為中心
3. 学会等名 「中國文獻デジタル化の展望」(招待講演)(国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 玄幸子
2. 発表標題 《廬山遠公話》中出現的民俗佛教實際情況 以佛教史跡的記錄為中心
3. 学会等名 第三屆東亞文獻与文学中的佛教世界會議 (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 玄幸子
2. 発表標題 關於市立米澤圖書館所藏《困學紀聞》20卷
3. 学会等名 上海復旦大学 “日本古寫本與中國典籍”系列講座 (国際学会)
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 吾妻 重二ほか共著	4. 発行年 2019年
2. 出版社 関西大学東西学術研究所	5. 総ページ数 512
3. 書名 東西学術研究と文化交渉	

1. 著者名 玄幸子ほか共著	4. 発行年 2020年
2. 出版社 関西大学出版	5. 総ページ数 200
3. 書名 続 中国周辺地域における非典籍出土資料の研究	

〔産業財産権〕

〔その他〕

http://www2.kansai-u.ac.jp/gen2020/

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	高田 時雄 (TAKATA TOKIO)		

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	梅維恒 (Mair Victor)		
研究協力者	張 涌泉 (Zhang Yongquan)		